

# ビオトープ





## 目次

B o r i n g t o M E	5
おやますわりでまっついて	25
モーリー	73
B r o k e n Y o u t h	111
日付変更線	145
ピオトープ	197

ビオトープ

こんにやく



B  
O  
R  
I  
N  
G  
  
t  
O  
  
M  
E

すべてがスローモーションみたいに動いていた。

私の右手は国語辞典を持ったまま、まるで漫画のオノマトペみたいに「ぶん」と空気を切ると、ゆっくりと弧を描きながら彼の頬にめり込んだ。「ごり」とやっぱりオノマトペみたいな音がして、彼はその場に崩れ落ちた。

うう、と呻いたような気がしたけれど、それはすごくちんけな感じで笑ってしまう。辞典から伝わる衝撃が指先を痺れさせる。倒れた彼をじっと見つめた。彼は顔を伏せていて、ううとかああとかそういうことを呻いていた。突っ立ったまま上から眺めていたけれど、一向に起き上がる気配がない。

私に仕返そうとはしない彼にイラついて、転がる背中を思い切り蹴飛ばした。「どん」とくぐもった音。続いて咳き込む音。うう、と、唸る。横向きになっていた体を仰向けにして、赤くなつた左頬を両手で押さえて。

「……は、は」

彼から漏れたのは笑い声。それが私を笑う意味なのか彼自身を笑う意味なのかかわからない。私の脳内ではふつつんと何かか切れる音がして、彼をぐちゃぐちゃにしたい衝動が走る。ふざけんな、と口から思わず言葉の切れ端が漏れる。

高校のとき、魚類や鳥類は大腦が小さいから理性がないんだって話を聞いたのか、勝手に思ったのか定かではないけれど、今の私は大腦がなくなってるんじゃないかって思う。

彼に馬乗りになって、国語辞典でも中身が半分ぐらいのペットボトルでも、とにかく落ちてるものは何でも手に取って殴って、殴って、殴りまくった。

殴って、殴って、殴るたびに彼がもらす嗚咽が、私を煽る。

私の腕は止まらない。バカみたいに、いや、ただのバカなんだけど、とにかく殴って殴って殴って、自分の手の感覚がなくなった頃によく彼から退いた。

怒っているのか泣いているのか、わからないけれど、涙と汗と鼻水と血でぐちゃぐちゃになった彼はぼんやりと私を見ている。バーカ。声には出さず、声の動きでそう言っただけだった。死ぬ。そうとも言った。そしてへらへら笑った。どうしようもなかった。



おやますわりでまっています

---

おやますむらひぢまひてらふ

セーラー服で体育座りをさせるなんていうのはある意味拷問だ。スカートのウエストがぐいっとお腹に食い込んでくるのも不快だけど、それ以上に立てた膝を正面から見られるとパンツまで見られてしまう可能性がある。スカートの裾を持ちながら膝の下に手を入れてパンツを隠す体勢が結構きつい。短い話だったらまだいいけど、全校集会なんかアイスのない体育館で始まった日には本当に拷問。足を崩して斜め座りをするところからともなくやってきた体育教師が後ろから小突いてくる。男子の胡坐は許されるのに、どうして女子の斜め座りが怒られるのか私はこっそりと憤慨している。だから、集会よ早く終れと何度も頭の中で念じながらしびれてきた手を組み替えたり、体を前に屈めてみたり、注意されない程度に斜め座りを実践してみたりして、どうにかこうにか凌ぎ続ける。高校生にもなつてこんな座り方をさせられるとは。圧迫される胃がきりきりと痛くなってきた。

小学生の頃——といって五年前ぐらいだけ——には母さんに「おやますわりで

待つてなさい」とよく言われた。「いい子にしなさいよ」の意味で、母さんがちよつとその場を離れたりするときの癖だったみたいだ。昨年亡くなったお祖母ちゃんもよく私に言っていたし、代々伝わってる言い癖らしい。母さんがそう言うたび、私はなぜか背筋が伸びる思いで、本当に姿勢よくおやますわりをしていた。おとなしく待つていれればいいだけの話だったのに、母さんがコンビ二に寄つて車を降りるときもそういうので、後部座席でおやますわりなんかをしてみたりして、逆に靴が汚い、と怒られたりしたのだけど、それでも、言われると足を抱え込まなくてはいいい子だと思われないようで、落ち着かなかつた。

高学年になつても母さんはよく「おやますわりで待つてて」とよく言った。さすがに言葉の意味をそっくりそのまま捉えることはなかつたし、いたずらつ子でも騒がしい子でもなかつたから、言われること自体が少なくなつてきた。今ではたまたま学校でさせられるぐらいだけど、それがつらい。

「詩音、ごそごそしすぎ」

集会が終わり、教室に戻る群れに紛れ穂実が隣に並んでいた。

「だって、おなか痛くなつてきちやつたもん」



モ  
ー  
リ  
ー

白いお皿に乗っていたのはなんだったかと私が考える暇もなく、モーリーはそれらをペロリと食べ終わると、また席を立つ。テーブルにはお皿が三枚積み重ねられ、脇にはティーカップが三つとグラスが二つ、中身は何も入っていない。モーリーは色とりどりのケーキを載せてはペロリと食べて立ち上がっていく。モンスターに立ち向かう果敢な戦士のような。一方、ティーカップ一杯のカフェオレも飲み干せない私は貧弱な農民。モンスターの餌になることもなく、踏み倒された木の下敷きになって死ぬ役目。ミルクたっぷりおいしいカフェオレとかいうコーヒー風味の乳を飲み干す力もない。お腹が空きすぎると逆に何も受け付けられないんだよな、と思いながら角砂糖を一つ入れた。さつきも一つ入れたのだけど、温度が低いから全然溶けないらしく、甘みがない。スプーンでがむしゃらに混ぜてみたが、あほらしくなってやめる。

戻ってきたモーリーはこれで最後にしよう、とひとりごちて丸いメロンがいくつか乗ったプリンと、ガトーショコラと、プチシューを三つ、お皿に載せてきた。口の端

についたカスタードを嘗め取るとふう、と息を吐く。

「もうさ、どうしようもないんだよね」

モーリーはいかにも辛そうに眉間にしわを寄せて溜息をついた。溜息をつきたいのはこんなコーヒ―臭い乳を飲まされている私だというのに、彼女のぷりんとした唇から愚痴がこぼれるたびに一つひとつを掬い取ってあげたくなくなってしまふ。

「浮気されてるんだらうなって思って、腹立つんだけど、彼に怒る気力も湧かないっていうか、浮気されてる私が悪いのになって思うのか、でも、向こうが別れたいって言わないと私が言うのもなんかおかしいって気がして、惰性だよ、惰性」

「別れたらいいのに」

半ば本気で言うけれど、モーリーは私が本気のほの字も出してないと思ってる。でも、嘘でもそう言われたいから、ケーキバイキングに興味のない私をわざわざ連れてきて、元が取れない私の分の料金も払って、向かい合って座っているのだ。本気で言われたら言われたで困るんだらうこともわかってる。わかっているから、私は半ば本気で言ってる。半ば優しくしてやる。彼女がそうしたいなら、私はそうする。

「そうだよねえ、私も馬鹿だなあ。どうしようもないんだよね」





B  
r  
o  
k  
e  
n  
  
Y  
o  
u  
t  
h

マンションの隣の部屋に住むいとこの姉ちゃんはレズビアンらしい（というのは女しか好きになれない女のことらしい）。いとこの姉ちゃんの父さん、つまり俺の叔父さんが実はゲイ（というのは男しか好きになれない男のことらしい）らしく、姉ちゃんが小学生のときに親が離婚して、叔父さんは家を出て行ってしまった。それから姉ちゃんは男性不信とかいうのに陥って、家族親戚以外の男が嫌いなんだっていう。だからって仲が悪いわけじゃない。たまに姉ちゃんと叔母さんが俺の家に来て夕飯一緒に食べたりして、むしろ全然良いほうなんじゃないかなって、思う。

ちなみに俺が、姉ちゃんがレズビアンだってことを教えられたのは小学五年生のときだったけど（というのは叔母さんが、家に帰ってきたときに姉ちゃんと姉ちゃんの同級生がキスしてたのを見てしまったのを、うちの母さんに言いに来たから家族に知れ渡った）、それからことあるごとに父さんや母さんからは、姉ちゃんがそうだったいきさつと一緒に「妃子<sup>ひこ</sup>ちゃんは妃子ちゃんなんだからね」って何回も聞かされてい

る。

五月も半ば、学校から帰ってきて洗濯物を取り込んでいると右側からほのかに煙が漂ってきた。右側は姉ちゃんの家。顔を向けると姉ちゃんはタバコを吸いながらベランダでぼけつとしていた。キャミソールとパンツ一枚で、タバコを吸っている姉ちゃんはいかにも危ない女に見えて、俺に気づくと青白い顔を向けてにやりと笑う。目の下には不健康そうなクマがある。

「女がそんな格好でタバコ吸うな。学校行けよ」

「香、おかえり」

「人の話聞けよ」

「大学生はそんなに授業ないんだよ」

焼きソバみたいにばさばさになった髪の毛を、姉ちゃんはがりがりかきむしつてまたタバコを吸った。黄色っぽくなった空を眺めながら、春と夏の間の生暖かい風にかかれて白い息を吐く。そうしてその動作の延長で口を開いた。

「彼女できた？」



日付変更線

1. ゆかり  
紫

爪を塗ったら平常心が保てるかと思っただけ、手が震えてはみだしまくった。雑誌には綺麗にマニキュアを塗る方法の特集が組まれてるけど、そういうのを見るのは少し癢。私は自分の爪の形や大きさは結構好きだから、マニキュアを塗るとそこはかたなくテンションは上がる。でも今日みたいな日には上手く塗れなくて、テンションはがたさがり。

ふと意識を集めたら、はあー、と自分の口から深刻な溜息がこぼれていた。やだやだ。こういう辛気臭いのは好きじゃない。いかにも不幸ですって顔をしてる奴も、それを遠回しに自慢してくる奴も。何より、辛気臭いなんてのは私には似合わないって彼なら言うだろうから、その期待に沿うように。赤いマニキュアがまたはみでた。しかも許容できる範囲じゃない。

さつきから縮こまって塗っているもんだから肩が凝ってきた。全然関係ないのに、踵にできた靴擦れが痛む。この間買ったサンダルがまだ足になじんでなくて、無理して履いたら踵に水ぶくれができててまた全然知らんふりして履きつづけていたら、水ぶくれは破れて中から水じゃなくて血が溢れた。帰ってきてきてなんかぬるっとして激痛、と思つたら足が踵から血まみれになつてるからちよつと笑つたし、今までの経験上、ああいうサンダルってたぶんずっと柔らかくなることもないし、なじむこともない。でも私は捨てない。正直、使い勝手の悪い道具を傍に置いておくのは癪だけど、彼が私に似合うといつて、微笑んで、あの服にも合うとかこの服にも合うとか言ってくれて買ってくれたサンダルを、捨てられるわけがない。あ、またマニキュアはみ出た。溜息。やだやだ。そうしてもう一度時計を見上げる。

彼は今日は帰ってくるって言つた。もう絶対に帰ってくるって言つたのだ。

昨日の夜も、今朝も、そうしてお昼も、夕方も、彼はこまめにメールをくれた。彼の親友の中野くんだったって、あいつのこと信じてやってよ本当にゆかりのこと好きなんだよって言つてたし、彼よりも中野くんの方が信用できるってのもどうなんだって感じもするけど、でもやっぱり中野くんの方が信用できるし、そんな中野くんが言うの





ビオトープ

バスに揺られながら、流れる景色をぼうつと眺めた。

夜の街を走るバスには、駅から家に向うサラリーマンだったり遊んだ帰りの学生だったり、そういう人たちがただそれぞれに他のことを考えて乗っている。わたしもその一人だ。街灯が少ないこの街をバスで通るとき、居酒屋やコンビニの、都会では気にもとめないような明かりがまるで、救世主のように暗闇の中に浮かび上がり辺りを照らしてくれる。

耳には好みの音楽を流し込み、わたしはただただバスの外と同じような景色になじもうとしている。

他の誰かがそうであるように、わたしはわたしの時間を生きていて、他の誰かは景色になる。他の誰かにとっても、わたしは景色になる。そうしようと徹する。誰もがそれを共有している。



# ビオトープ

平成二十五年三月三十一日発行

著者 こんじやく

<http://sbrxsbr.web.fc2.com/>

カバーイラスト・デザイン ユタカ

<http://moz00.6.q1.bz/>

印刷所 株式会社ポプルス

<http://www.popls.co.jp/>